

古写真でたどる今出川キャンパスの昔

案内人	松居 宏枝〔まつい・ひろえ〕
案内人紹介	同志社社史資料センター社史資料調査員

Doshisha Spirit Weekの恒例企画である「キャンパスめぐり隊」は、新型コロナウイルス感染症の流行により、２０２０（令和２）年春・秋、２０２１（令和３）年春の計３回の開催が見送られた。２０２１年10月29日13時10分から開催されたツアーは、すがすがしい秋晴れに恵まれ、また教員・学生多数にご参加いただき、２年ぶりとなる喜ばしいスタートとなった。

今回のツアーは、「古写真でたどる今出川キャンパスの昔」と題した。参加者には手元に配布した古写真を掲載したレジュメと実地を比較しながらその変化に触れてもらいつつ、キャンパスをめぐった。

それではあらためて、皆様を紙面上「キャンパスめぐり隊」のツアーへご案内したい。ツアーは、礼拝堂の前に集合し、そこから彰栄館前、図書館前、図書館の西側から裏に周りパーパスロードに出る。それからハリス理化学館の西側から裏に回り、ハリス理化学館と至誠館の間を通り、最後にクラーク記念館の前で解散する、というコースでめぐる。

彰栄館

現在の彰栄館に慣れていると、〔写真１〕はどの向きの彰栄館の写真かと思われる方も多いだろう。それとは逆に、この写真を見て懐かしいと思われる方もおられるだろうと予想する。彰栄館と礼拝堂の間には、かつて新彰栄館と呼ばれる、増築部分があった〔写真２〕。新彰栄館は１９５１（昭和26）年に建てられ、２０１２（平成24）年に解体された、同志社中学校の教室、校長室、事務室等があった建物である。現在の彰栄館を正面からよく見ると、時計塔を挟んで左右の煉瓦に極わずかではあるが、色の違いをみることができる。

彰栄館の北側にまわってみよう。今度は、彰栄館の壁面にはっきりと色の異なる煉瓦があることがみて取れる。これは、かつて同志社中学校にあった「奉安庫（ほうあんこ）」の後である。独立したものを「奉安殿（ほうあんでん）」、建物とつながったものを「奉安庫」というが、戦争中に御真影や教育勅語謄本を保管するために設けられた建物である。１９３８（昭和13）年にハリス理化学館の南西角付近に同志社の「奉安殿」が建てられるまで、ここに「奉安庫」が設置されていた。

ここまで二つの煉瓦の壁の色の秘密をみてきた。ところで、同志社大学今出川キャンパス周辺の烏丸通についてはあまり言及されてこなかったように思われる。１９１７（大正6）年に京都市電敷設のために今出川通が拡張された。さらに、１９２２（大正11）年には、今出川通以北の烏丸通が拡張され、通りに面した同志社の敷地が削られた。同志社には、京都市から土地の代価と建物の移築、樹木植替の補償が支払われている。

さて、〔写真３〕をご覧ください。三つの白丸のうち、左が彰栄館と新彰栄館である。続いて真ん中の白丸で囲った聚芳館と、右の啓真館について説明したい。

聚芳（しゅほう）館

現在の図書館入口向かって右手の植え込みの中に、「一粒の麦」と刻まれた石碑がある。これは、かつてここにあった同志社商業高等学校（商高）を記念して、同校が廃校になった１９７６（昭和51）年に建てられた。同志社商業高等学校は、校名のよく似た同志社高等商業学校（高商）と混同されがちであるが、商高は28年続いた４年制の夜間の定時制高等学校である。聚芳館は１９２２（大正11）年に建設され、同志社中学と高校の教室、経済専門学校、そして商高の校舎として使用された。木造２階建てで、昼間は同志社高校、夜は商高が使用した。聚芳館を使用して授業を行っていた商高であるが、戦後すぐには教科書も電気も不十分で、しばしば停電するなか、昼間働いている学生らは夜に商高で勉強に励んだ。１９７２（昭和47）年、聚芳館は現在の図書館建設のために解体され、商高は新町キャンパスの旧臨光館へ移った。しかし、独立採算制をとる同志社の中において商高の経営は難しく、ほとんど赤字の状態で、１９７６（昭和51）年に惜しまれつつも廃校となった。最後の卒業生は25名であったが、国立京都国際会館D室で行われた卒業式には、第一回からの卒業生、旧職員が列席し行われた。

廃校の同年、石碑「一粒の麦」が卒業生らの寄付によって建てられた。揮毫（きこう）は上野直蔵総長によるもので、ヨハネによる福音書12章24節による。

啓真館

それでは、西門の守衛室向かって左側の小道に入ってみよう。入ってすぐの西門守衛所の裏に、破風（はふ）がある。これは、図書館ができる前にあった啓真館の破風である。〔写真４〕の啓真館は、１９５３（昭和28）年から大学院の校舎として使用された。もとは旧徳大寺邸に建てられた華族会館（京都分館）で、建物が建築されたのは１８７９（明治12）年、同志社が第一回卒業生を送り出した年であった。建物には、旧閑院宮邸の東車寄せと表門が移築された（〔写真４・５〕）。表門は現在の通称「大学院門」である。啓真館が大学院校舎であったことからこう呼ばれている。建物は戦後、進駐軍によって接収され、１９５２（昭和27）年の接収解除後に同志社が購入した。

〔写真６〕にもみられる築地塀は現在の図書館周辺にもありそのなごりを思わせるが、塀自体は１９７９（昭和54）年に鉄筋コンクリート製に改修されている。〔写真６〕は図書館建設のために解体される前の啓真館を写したものである。

〔写真６〕にみえる烏丸通、そして〔写真７〕の今出川通には、京都市電の電停が見られることも興味深い。市電は、１９７７（昭和52）年10月１日に廃止された。

石橋通／新北小路

パーパスロードは、もとは石橋通という公道だった、という話がまことしやかに伝わっているが、ここで少し訂正しておきたい。石橋通は、現在のパーパスロードの南側に位置し、図書館、明德館、弘風館の北側のラインに沿った通りであった。烏丸通にある喫茶店「モナミ」の南から入る通りが、石橋通の残りの部分である。要するに、「モナミ」南側の通りの延長上が石橋通である。となると、石橋通＝パーパスロードではないことがわかる。さらに、明德館と冷泉家の間にある道も、もとは新北小路という公道であった。中世、今出川通は北小路と呼ばれており、そこから派生した名称と推察される。前述したように、１９１７（大正6）年に今出川通が京都市電敷設のために拡張されるにともない、石橋通と新北小路の約半分が「構内に収用」された（「同志社大正6年度報告」）。つまり、今出川通に面した土地を道路の拡幅にともない提供し、かわって石橋通と新北小路の約半分を校地にすることができた。これによって、それまで道に隔てられた彰栄館、礼拝堂、ハリス理化学館、クラーク記念館の一带と有終館、致遠館の一带は、一つの校地として地続きになった。

〔写真８〕を見てみたい。この写真には、ハリス理化学館、礼拝堂、彰栄館が見えるが、手前から左手に伸びている道が石橋通である。ハリス理化学館にはまだ天文台が見える。天文台の撤去工事が開始されたのは、１８９３（明治26）年３月からである。濃尾地震で倒壊したため、と書かれているものもあるが、地震で倒壊したため撤去されたのではなく、正確には建築が粗く、撤去の２年前の１８９１（明治24）年に発生した濃美地震を受けて、地震の際に支える力がないことが危惧され撤去に至った。

〔写真９〕は現在のクラーク記念館の南西角付近から撮影された写真で、真ん中付近を貫く通りが石橋通である。その向こうに写る塀に囲まれた建物と有終館の間にあったのが、新北小路である。

ツアーは、パーパスロードの楠や、ハリス理化学館の裏手にかつてあった建物などに触れつつ、クラーク記念館の周辺をめぐって終了した。今回のツアーで古写真を見ながら私達が注目したのが、①煉瓦の色のちがい（煉瓦の色が違うところは、かつて何か別の建物が付属していた可能性がある。e.g. 彰栄館、ハリス理化学館の裏手）、そして②パーパスロードをはじめ学内に点在する石碑（e.g. 一粒の麦、パーパスロードの楠の寄付）の二つであった。今回紹介できたのはそのほんの一例であったが、そうした視点をもって学内を歩いてみると、また違ったものが見えてくるかもしれない。

キャンパスはどんどん変化していく。あるものは消え、あるものは残り、あるものは足跡を残す。キャンパスは今日も年輪を刻んでゆく。

【参考文献】

河野仁昭 『キャンパスの年輪—同志社今出川校地—』 同志社大学出版部 １９８５
松本利治 『京都市町名変遷史』第１巻 御所周辺、京都市町名変遷史研究所 １９８８

白い丸は筆者による。

〔写真4〕1969（昭和44）年の烏丸今出川

〔写真5〕1972（昭和47）年8月啓真館

〔写真6〕1972（昭和47）年8月啓真館（解体前）

〔写真7〕1967（昭和42）年11月25日啓真館南面

〔写真8〕1891、1892（明治24、5）年頃同志社外観写真

〔写真9〕年代不明 有終館

※写真の表示はホームページでは省略します。